

外来語音におけるゆれの類型 -辞典類の表記を中心として-

松崎 寛

1. はじめに

本稿ではシェ ジェ イェ ヒェ ニェ チェ ツァ ツェ ツォ スィズィ ツィ ティ ディ トゥ ドゥ テュ デュ ファ フィ フェ フォ フェ ウィ ウェ ウォ の、辞典類における表記のゆれを調査した。以下これらを外来語音と称し、それ以外の、和語・漢語にも用いられるものを日本語音と称する。ヴァ行に関しては、表記上はバ行との区別を有するが、発音上は両唇閉鎖音[b]となるのが現段階では一般的なもので、ヴの表記が[b]と[v]との間の発音のゆれを反映しているとは考えがたい。よって今回の調査の対象外とした[注1]。

2. 研究の目的

現代日本語の音韻について考える際には、外来語音のうち何と何を日本語の一部に含めるかという問題が起こってくる。外来語は和語・漢語に比べると語数が少なく、最小対を形成する語例の選択が困難である上、表記・発音のゆれがはげしいため、判断者により結果が異なってくる。いま先学の説の一部を整理してみると表1のようになる[注2]。

表1	シ	ジ	チ	イ	ヒ	ニ	ツ	ヅ	ス	ズ	ツ	テ	ト	ウ	エ	オ	フ	ヴ	ウ	ウ	ウ
ブ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
国語学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
田一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
馬淵	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
城生	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
[5]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
[6]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
古田	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
[7]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吉田	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
[8]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
上村	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小泉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
[9]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
国研	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
[11]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

ここに見られるように外来語音の定着度の基準は曖昧なため、語種による階層を設定して和語・漢語と外来語との間で一線を画し、日本語の音韻を考える上で外来語音はすべて扱わないとする論も多い。奥村[12]は次のように述べる。

「もともと擬声語や外来語の発音は、それぞれ言語音に対立する表情音とか、ごく少数の言語学者のみが発音する外国語音等に連なるゆえ、その音韻論的認定には、どこかに歯止めが必要である。今、外来語について言えば、「チ(tʃi)ーパーチャー」というような発音が大幅に減少し、「ティ(ti)ー」の発音がかなり普及した事は確かだが、しかし「team・teak・ticket・titan・tip・typhus・tinc」等は、今でも「チーム・チーク・チケット・チタン・チップ・チフス・チンキ」のごとく、チ(tʃi)形が普通である。(中略) sje、zje などの場合も、「シェード・シェルパ・ジェット」のごとき表記より、むしろ「セパード・ゼスチャ・ゼネレーション・ゼラチン・ゼラニウム・ゼリー・セントルマン」のごとき表記がめだつ。それらが日本語音韻としての地位を占めるようになれば、右記のごとき表記の問題も概ね解決しているはずだと思うのである。」(p5-7 原文縦書き)

たしかに上記の例の内いくつかは、日本語音で安定してゆれがない。しかし、外来語における日本語音から外来語音への変化は一律に行われるのではなく、語により異なるのである。原音[tʃi]が「チ」となるものもあるが、それを論拠に「ティ」を排斥すれば、「ティ」で安定した例との間で水掛け論に陥るだけである。外来語音を論じる際に考察の対象とするべきは、外来語音で安定した語、あるいはゆれている語であって、日本語音で安定した語があってもそれは反例にあたらないと考えるべきであろう。また、「フュ」に関しても、「ヒューズ(fuse)」の一語をもって「フュ」は日本語には定着しないと論があるが、「フュ」を含む語は、「フューチャー」「フューチャリズム」「フューラー」「フュージョン」「フューネラルマーチ」「フュン島」「パフューム」「パフューマー」「ドレフュス事件」などのように辞典から採集しただけでも数多くあり、このうちの多くには表記のゆれが全くない。すなわち、外来語音の定着度は語ごとに決まっているというべきであり、少数の偏った例から外来語音を論ずれば、結論が誤った方向に行きかねないのである。

本稿の研究目的は、このような外来語音の表記のゆれの実態を調査し、ゆれの類型をたてることにある。語の採集は次の16種の辞典類により行った[注3]。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 『情報知識inidas』(1990) | 『現代用語の基礎知識』(1990) |
| 『基本外来語辞典』(1990) | 『日本語大辞典』(1989) |
| 『新明解国語辞典』第四版(1989) | 『大辞林』(1989) |
| 『図解外来語辞典』第三版(1988) | 『学研国語大辞典』第二版(1988) |
| 『コンサイス外来語辞典』第四版(1987) | 『岩波国語辞典』第四版(1986) |

『言泉』(1986)

『小学館現代国語例解辞典』(1985)

『三省堂国語辞典』第三版(1982)

『旺文社国語辞典』改訂新版(1986)

『広辞苑』第三版(1983)

『NHK 放送のことばハンドブック』(1987)

(以下、『イミ』『現代』『基本』『日本』『新明』『大辞』『図解』『学研』『コン』『岩波』『言泉』『旺文』『例解』『広辞』『三省』『NHK』とよぶ)

次のような例は単なる表記上のゆれによるとは考えがたいため、調査の対象外とした。

- ①「カデンツァ(伊)/カデンツ(独)」「リアリティ(英)/レアリテ(仏)」 原語の違い
- ②「ブディング/プリン」「ラディッシュ、ラデシ/ラレシ」 綴字に頼ったか耳に頼ったか
- ③「チェロ / セロ」「ピッツァ / ピザ」「ツイッター / ジター」 原音と異なる綴字発音
- ④「スティック / ステッキ」「チェック / チッキ」 指示物の分化

3. 外来語表記法の規範

平成3年、国語審議会「外来語の表記」が内閣告示された。これは昭和29年の「外来語表記の原則」(以下「原則」とよぶ)を三十数年ぶりに見直したものである。

「原則」は、原音意識がなお残る「例外」としてあげた「ティー」「ビルディング」「プロデューサー」などの数語を除くと、外来語音をほとんど認めていない。これは石綿[13]の指摘にもあるように、「ファ フィ フェ フォ ティ ディ シェ ジェ テュ デュ フュ はなるべく ハ ヒ ヘ ホ チ ジ セ ゼ チュ ジュ ヒュ と書く」という極度に日本語化した形を採用した条文だけが遊離した感の強いものであった。

地名表記に関しては、昭和54年の教科書研究センター「地名表記の手引」(以下「地名」とよぶ)が学校教育の社会科の規範となっている。「原則」と比べると、シェ ジェ ファ フィ フェ フォ フュ ウィ ウェ ウォなどが認められているが、細則4の「ティ・ディ・テュ・デュはなるべく チ・ジ・チュ・ジュ のように書く」などはやはり現状にそぐわない。

一般の表記はこれら二つの制約を大きく受けているが、前述のように、外来語はゆれがはげしく、語ごとに定着度が異なるため、表記の規範としての統一的基準を設けることが難しいという問題がある。以上のようなことから、辞典の外来語表記では、語ごとに「原則」「地名」と異なる「例外」を多数認めている。またNHKでは日本放送協会放送用語委員会の決定事項をもとに、そして新聞社では新聞協会新聞用語懇談会の討議をもとに、独自に外来語表記の基準を設け、適宜改正を行うことで問題に対処している。

制約の緩和された今回の表記案は、このような現状を追認して語ごとにどんな表記を用いてもよいことを認可し、自然淘汰に任せたとところに意義があるといえる。

以下、外来語音の各々のゆれについて、具体例をあげて考察していくことにする。

4. 分析

4. 1. シェ、ジェ

「原則」には「セ ゼを用いる」とあるが、今回の調査では、「シェ/セ」のゆれは、「シェパード/セパード」「シェラック/セラック(ワニス)」の2語のみであり、「セパード」を本見出しとするのは『学研』『広辞』、「セラック」は『大辞』だけで、シェを本見出しとする方が圧倒的に多い。また、「セ」で安定したものも「ミルクセーキ」程度でほとんどない。しかし「ジェ/ゼ」はかなり多く、「ゼネスト」「ゼラチン」「ゼラニウム」「ゼリー」は「ゼ」で安定し、「エンゼル」「ゼネラル」「ロサンゼルス」は「ゼ」を本見出しとする方が多い。

これに対し、拗音1拍が連母音2拍との間でゆれる、拍数の変化するゆれがある。

シェラレオネ / シエラレオネ ラボアジェ / ラボアジェ

語数の少ない例外的なものとして、以下のような、「シェ/シュ」「ジェ/ジュ」がある。

アタッシュケース / アタッシュケース ジェラルミン / ジュラルミン

「シュワルナゼ」氏は、『NHK』でも「シェ」で表記・発音する規則だが、アナウンサーの発音は「シュワルナゼ」が圧倒的に多い。また、ジェに関しては、「ジェ/ジ」のゆれもある。

トラジェディー / トラジディー ジェッター / ジッター

4. 2. イェ

「イェ」も、直音「エ」とのゆれと、拍数の変化する「イエ」とのゆれがある。

イエニセイ川 / エニセイ川 イェルサレム / エルサレム

イエーツ / イエーツ / エーツ イェティ / イエティ

4. 3. ヒェ、ニェ

ヒェ、ニェは、『NHK』に、「使わない語」として「ミュンヒェン/ミュンヘン」「メルヒェン/メルヘン」が載っているだけで、その他の辞典類ではヘネになっている。

4. 4. チェ

チェにはゆれがない。チェが シェ ジェ等と異なるのは、チェの場合、拗音に対する直音での置き換えが生じにくいということである。つまり シェ ジェ イェ ヒェ ニェが セ ゼ エ ヘ ネ との間でゆれ、また後者で安定することがあるのに対し、チェはタ行のテとは交替しにくいし、下記の音韻体系におけるツァ行のツェでは、これも外来語音で発音が難しい。逆に言えば、それゆえにチェは日本語に定着しやすいと解釈される。

表2	/ti te ta to tu/(ティテタトトゥ)	/ci ce ca co cu/(ツィツェツァツォツリ)
	/tju/ (ツィ)	/cji cje cja cjo cju/(チヰチヱチヰチヲチリ)

「シェ/シエ」と同様の、「チェ/チェ」のゆれが次のものにみられる。

ツールボワチェの戦い / ツールボワチェの戦い、トゥールボアティエの戦い

4. 5. ツァ、ツェ、ツォ

ツァ ツェ ツォは、おもにドイツ語(コンツェルン シャンツェ ツェッペリン)、イタリア語(フィレンツェ カンツォーネ スケルツォ)、ロシア語(ツァーリズム)、中国語(チンゲンツァイ)などを原語とする外来語音で、語例が少ない。「原則」「地名」でも特に規制を受けたことがなく、比較的安定しており、実際の発音では2拍分になることも考えられるが、表記のゆれは全くない。これはチェと同様、音韻体系中に他に交替し得る拍がないためであろう。ただし、ツェに関しては、チェとの間でゆれる例がある。

コンツェルト / コンチェルト ツェルニー / チェルニー

この原因には原語の違い(コンツェルト(ド)/コンチェルト(イ))や、原綴の読み誤りも考えられるが、たとえば『広辞林』新訂版(1934)の「ツェッペリン」の項に「チェッペリン」とあることや、「コンツェルン」「フィレンツェ」などが、しばしば「コンチェルン」「フィレンツェ」と発音されることも考え合わせると、シェ/セ、ジェ/ゼのようなエ段拗音のゆれと同様、直音ツェが拗音チェとの間でゆれる例であるとも解釈できる。ツェ→チェへのゆれはあってもチェ→ツェがないのは、両者の受容度に差があるためであろう。

4. 6. スィ、ズィ、ツィ

スィ ズィは、『三省』に異表記として「スィー(C)」「スィーズン」があるだけで、本見出しはない。C(スィー)、Z(ズィー)は他の辞典では「シー」「ゼット」となっている。[注4]

服部[14]は外来語音を2種に区分し、定着のやさしい ティ ディなどを音韻体系の「あきま」に入るモーラとよび、スイ ズィ ツィなどを音韻体系の「すきま」に入るモーラとよんだ。スイ ズィ ツィはI段の直音・拗音の組替えを要求する拍である。たとえばツイを音韻体系に取り込むと、チが直音ツァ行から拗音チャ行への移動を余儀なくされる。

表3 ↓[tʃi](ツイ)

/tʃi/	ce ca co cu/(ツィ ヴィ ヴォ ヴィ)	→	/tʃi/	ce ca co cu/(ツィ ヴィ ヴォ ヴィ)
/tʃe/	cja cjo cju/(チィ フィ フォ フィ)		/tʃi/	cje cja cjo cju/(チィ フィ フォ フィ)

これはサ行におけるスイ、ザ行におけるズィと同様の音韻論的操作であるが、ツイはインテリゲンツィア / インテリゲンチア ティツィアーノ / ティチアーノ
ツィゴイネル(ワイゼン) / チゴイネル(ワイゼン) ツィター / チター
のように、チとの間でゆれているものが多く、人名では、ソルジェニツィン エリツィン
ツィーグラー など、ツイで安定している語も多い。これはツァ ツェ ツォと同様、ツイ
が表記の規制を特に受けなかったことに起因すると考えられる。外来語音の定着の問題
には、音韻論的な視点だけではなく、表記上の制約の問題が大きく関与している。

以下のような例は「シェ/シエ」と同様のゆれである。

ツィーター / ツイーター / トゥイーター

4. 7. ティ、ディ

安定した語が多い。「原則」「地名」とともに「チ ジと書く」とあるが、現代では逆に、チ
ジを例外として、「チンキ」「ラジオ」など慣用のあるものにあてている。ゆれの種類は、
アーティスト / アーチスト スティーブソン / スチーブソン
エロティシズム / エロチシズム ペティコート / ペチコート
エディンバラ / エジンバラ ディレクター / ジレクター
モディリアニ / モジリアニ ラディカル / ラジカル
のような「ティ/チ」「ディ/ジ」のゆれと、以下のような「ティ/テ」「ディ/デ」のゆれがある。
ティラピア / テラピア アイディア / アイデア アコーディオン / アコーデオン
キャンディ / キャンデー ディベロッパー / デベロッパー ディテール / デテール
ディスコティック / ディスコテーク ハンディキャップ / ハンデキャップ

4. 8. トゥ、ドゥ

ティ ディがタ行 ダ行の直音イ段の「あきま」に入ると同様、トゥ ドゥもウ段の「あきま」に入る音である。だが、ゆれのないものは「アン・ドゥ・トロア」「ウルドゥー語」「ドゥイットユアセルフ」などが少数ある程度で、現在のところ語例が少ない。ゆれの種類は、

シュトウットガルト / シュツットガルト	トゥーアウト / ツーアウト
ツァラトゥストラ / ツァラツーストラ	バストゥール / パスツール
ヒンドゥー / ヒンズー	メドゥーサ/メズーサ

のような「トゥ/ツ」「ドゥ/ズ」のゆれと、以下のような「トゥ/ト」「ドゥ/ド」のゆれがある。

トゥルクメン共和国 / トルクメン共和国	ハチャトゥリアン / ハチャトリアン
ドゥシャンベ / ドシャンベ	ボンパドゥール夫人 / ボンパドール

4. 9. テュ、デュ

デュは、「デュエット」「プロデューサー」「コーデュロイ」「フォンデュ」などゆれのない語が多い。慣用が固定した「ジュラルミン」のような少数の語を除けば、現在ゆれのある語もデュに変化しつつある。一方でテュにはチュとゆれているものが多く、「コスチューム」「スチュワードス」「チューリップ」「チューブ」などチュとなるものも多い。

デュッセルドルフ / ジュッセルドルフ	ホンデュラス / ホンジュラス
デュロック種 / ジュロック種	テューダー王朝 / チューダー王朝
インスティテュート / インスティテュート	テューバ / チューバ

4. 10. ファ、フィ、フェ、フォ

「原則」には「ファ フィ フェ フォは ハ ヒ ヘ ホと書く」とあるが、ほとんどの語が外来語音で安定しており、ゆれは「ファ/ハ」「フォ/ホ」に集中している。日本語音で安定した語としては、「ブレハブ」「モルヒネ」「ヒレ」「ヘット」「アルミホイール」などがある。

ウエファース / ウエハース	セロファン / セロハン	サイフォン / サイホン
テレフォン / テレホン	サキソフォン / サキソホン	ビブラフォン / ビブラホン
シンフォニー / シンホニー	ユニフォーム / ユニホーム	

ファ フィ フェには、以下のような、拍数の変化するゆれがある。ただし「フィルム」型を本見出しとするのは『三省』だけで、表記としては「フィルム」が主流といえる。

ファン / ファン	ドンファン / ドンファン	マリファナ / マリファナ
フィルム / ファイルム、	スフィンクス / スフィンクス	フェルト / フェルト

例外的なものとして、フィ フェ がフとの間でゆれているものがある。

フィクサチーフ / フキサチーフ レフェリー / レフリー

4. 11. フュ

語数は少ないが、フューラー フュージョン など、ゆれがないものも多い。

パーフェーマー / パヒューム、パーヒューム フェーズ / ヒューズ

フューチュリズム、フューチャリズム / ヒューチャリズム

などは「ヒュ」とゆれているが、「フェーズ」を本見出しとするのは『現代』のみである。

4. 12. ウィ、ウェ、ウォ

「原則」には「ウィ ウェ ウォと書く」とあり、「地名」には「ウィ ウェ ウォと書く」とあるため、NHK・新聞は両者にしたいが、「人名地名は ウィ ウェ ウォ、それ以外の一般名詞は ウィ ウェ ウォ」という使い分けをしている。辞典でも『学研』『言泉』『コン』は同様の規則を明記し、語ごとの慣用とは無縁に表記を統一している。

これに従えば、同じ 'way' 'wall' でも、地名「ミッドウェイ」「ウォール街」はウェ ウォが小文字、一般名詞「ハイウエー」「ウォールフラワー」はウェ ウォが大文字となる。しかしそもそも一般名詞と固有名詞の境界は曖昧なものであり、たとえば「ウィーン」は地名なので、大抵はこれを小文字で扱うが、「ウィンナコーヒー」「ウィンナソーセージ」「ウィンナワルツ」になると、「ウィンナ」を「ウィーン」の派生とみるのか、一般名詞に大文字をあてる『日本』『学研』『言泉』『例解』でも、小文字を本見出しにしている。

一方、ウィ/イのような合拗音と直音のゆれは、「ウォールナット/オールナット」を除くと、同一形態素内の直前の拍に母音/u//o/が来るときに限られると解釈される。

ガーシュウィン / ガーシュイン スウィフト / スイフト スウィング / スイング
クウェート / クエート スウェー / スエー スウェーデン / スエーデン
サンドウィッチ / サンドイッチ ハロウィーン / ハローイン

前述のような地名人名は外来語音となるため、同じ sweet でも、さつまいもは「スイートポテト」、人名は「スウィート」となる。だが実際の発音では、たとえば「クウェート」と「クエスチョン」の違いはそれほど明確でなく、ウィ ウェ部分の発音には、wi weに近いものから i eに近いものまで、人により、また場合により無限の中間段階が存在する[注5]。小泉[10]には、スウェーデン、ノルウェー、ミッドウェー の発音は、スエーデ

ン、ノルエー、ミッドエー だという指摘がある。いうなればこれらは、ウィ ウェの発音意図がなくともある程度自然に、わたり音的に出るものであり、この中間段階に意識を置き、外来語音として意識するかどうかは、発音者、聴取者の意図に関わる面が大きい。

5. まとめ

以上、これらのゆれをまとめて類型を立てると、次のように分類できる。

A 1拍にあたる外来語音と日本語音2拍分がゆれているもの

シェ/シエ	ジェ/ジエ	チェ/チエ	イエ/イエ				
		ツイ/ツイ					
ファ/ファ	フィ/ファイ	フェ/フェ		ウィ/ワイ	ウェ/ウエ	ウォ/ウオ	
	ティ/テ	トゥ/ト		ディ/デ	ドゥ/ド		

B 母音を共通要素として、外来語音と日本語音がゆれているもの

シェ/セ	ジェ/ゼ		イエ/エ				
スイ/シ	ズイ/ジ	ツイ/チ	ツェ/チェ				
ファ/ハ		フォ/ホ	フュ/ヒュ	ウィ/イ	ウェ/エ	ウォ/オ	
	ティ/チ	トゥ/ツ	テュ/チュ	ディ/ジ	ドゥ/ズ	デュ/ジュ	

C 子音を共通要素として、外来語音と日本語音がゆれているもの

シェ/シュ	ジェ/ジュ	ジェ/ジ
	フィ/フ	フェ/フ

Aタイプのゆれは、綴字発音の性質を持つ、拍数に変化するゆれである。かな文字と拍との間に相関があることはよくいわれるが、一音が一文字と対応するという意識が過剰にはたらき、拗音の小文字を拍と等価と見なすことがあるのは注目に値する。たとえば子供の遊びに、じゃんけんで勝った者が、出した手の意味する語に応じて歩けるというものがあり、チョコの「チョコレート」の拍数は5だが、子供は「チ・ヨ・コ・レ・エ・ト」のように切って6に数える。拍感覚が表記の影響を受ける例である。なお、ティ/テなどは拍数は変化しないが[注6]、永田[15]にもあるよう、ティ ディで安定した感の強い語が特に高齢者で テ デとなるのは、文字の影響を受けた発音の例と考えられる。

Bタイプのゆれは、音韻体系における拗音(直音)の「あきま」に入る外来語音と日本語

音の直音(拗音)との間で起きるゆれである。

Cタイプのゆれは語例が少ないが、子音の類似性が選択基準になる点が、母音を基準となるBと対照的である。これらは拗音の外来語音が、直音や日本語音の拗音となる点、広い意味で「レジュメ」「フィギュアスケート」「ドビュッシー」などが「レジメ」「フィギア(フィギャー)スケート」「ドビッシー」となる「拗音の直音化」と同様の現象である。

A Bが国語審議会や研究書などでゆれの典型とされるのに比べると、Cは辞典などでは単なる誤りとして処理されることが多いようである。たとえば「アタッシュケース」「レフエリー」に関して、本稿執筆者が1990/11に筑波大学生31名に行った表記・発音の調査では、結果は「シュ」「フ」が優勢となり、日本語音の方が一般に行われていることが推察されたが、辞典では、外来語音の方を本見出しとして扱うものが多かった。

発音	アタッシュェ 0 / アタッシュ 31	レフエリー 8 / レフリー 22
表記	アタッシュェ 1 / アタッシュ 30	レフエリー 10 / レフリー 21
	アタッシュ 基日新大図'学コ岩広三'N / アタッシュ 基日'新'大'図学'言旺小三	
	レフエリー イ基日大図学コ岩泉旺小広三N / レフリー 基c'言'小'三'	

(辞典名は頭文字。□'とあるのは、空見出しや異表記があげられていることを示す)

漢語において「手術」が「シジツ」、「新宿」が「シンジク」のようになる拗音の直音化が「ぞんざいな発音」として処理されるのと同様、規範意識がはたらくためであろうか。しかし、漢語の例は現在のところ表記にまで影響が及んでいないが、外来語においては、原語が意識されない場合、慣用の固定度が優先する可能性もまた大きいといえる。

注目すべきは、Aタイプのゆれでは、1拍の外来語音で安定した語はかなりあるのに、2拍の日本語音で安定した語は一つもないということである。たとえば「ウイスキー」「ウエハース」などはかなり慣用が固定しているように思えるが、『広辞』『現代』では外来語音「ウイスキー」「ウエハース」を本見出しとしている。前述の大学生の調査でも、

発音	ウイスキー 5 / ウイスキー 24	ウエハース 4 / ウエハース 25
表記	ウイスキー 19 / ウイスキー 10	ウエハース 20 / ウエハース 11

と、表記では外来語音が多くなった[注7]。Aは外来語音になる傾向が強く、中には連母音の方が原音に近いのに一拍の外来語音となる「誤った回帰」もみられる。Aのゆれが流動的で、日本語音で安定しているものがないのに比べ、Bの、原綴が意識されない外来語では、「プレハブ」「チップ」「スタジオ」のように、日本語音で安定したものも多い。

同原語が語形をかえて別語として借用される二重語現象も、Aではほとんど生じず、Bにのみおきている[注8]。たとえば、active には、「活発な」とか「左翼政党の活動分子」などの意味がある。前者は明治時代にアクチブのかたちで入り、その後発音・表記もアクティブにかわりつつある。だが政治用語としては現在でも「アクチブ」であり、「アクティブ」となることはない。また、antique(仏)は「骨董品」の意味では「アンティーク / アンチック」でゆれているが、「活字の字体の一つ」の意味としては「アンチック(アンチーク)体」を掲げる辞典が圧倒的に多く、印刷用語として「チ」が固定していることがわかる。

各語のおおまかな借用年代に関し、小学館『国語大辞典』・角川『外来語辞典』の「文献初出年代」、三省堂『コンサイス外来語辞典』、東京堂『増補外来語辞典』、東京堂『基本外来語辞典』の「借入年代」などを参考に整理すると次のようになる。ここからは、必ずしも古く日本語に入ったものの方が日本語音で定着するとはいえないようである。

	文献初出	関連語(異表記)初出	コン	増補	基本
アクチブ(活発)	1885	1918アクティーヴ	明	明	明
アクチブ(政治)	1950		昭	現	現
アンチック(骨董)	1954		明	※	明現
アンチック(印刷)	1963		明	昭	昭

(時代区分は「明治/大正/昭和/現代」。「現代」は第二次世界大戦から現在に至るまで)

同様に、「ハンティング/ハンチング」「セロファン/セロハン」「ウエファー/ウエハー」なども、「狩り」「紙」「菓子」の意味ではゆれているが、「帽子」「テープ」「集積回路」の意味ではそれぞれ日本語音で安定した感が強く、ラムネとレモネード、トラックとトロッコのように、指示物の異なる別語として定着するのではないかと考えられる。これらはすべてBのゆれの一方が安定したものである。だがAの場合の、「ファン/ファン」における「羽根」と「支持者」、「フィルム/フィルム」における「膜」と「カメラ」では、指示物の分化はそれほど一般的とは考えがたい。前述の大学生調査では、「支持者」の「ファン/ファン」や「カメラ」の「フィルム/フィルム」でも外来語音が多くなった。つまり、ゆれである。

発音	ファン	28	/	ファン	1	フィルム	18	/	フィルム	11
表記	ファン	30	/	ファン	0	フィルム	28	/	フィルム	3

外来語音の表記のゆれの問題は、先行研究においては項目羅列的に論じられることが多かったが、このような類型をたてることによって、以上のべてきたような、問題の総合的、統一的な説明が可能になるのである。

【注】

本研究は日本学術振興会特別研究奨励費により平成二年度筑波大学大学院修士論文『外来語音と現代日本語音韻体系-「あきま」の概念を中心に-』に加筆修正したものである。

- 1) ただしこのことを、音韻的に無意味なものは表記法に取り入れるべきでない、としてヴァ行表記そのものを排除する意見と混同すべきでない。表記面に限ってヴァ行を捉えるなら、これは原音の[v]を示す機能を担っており、「はなぢ」「みかづき」のような、後行成分の元綴を示すチ・ツ濁に類する機能を有すると考えられる。制限が緩和された「外来語の表記」を経た今後、一般名詞でヴァが安定する可能性は高い。
- 2) 厳密には金田一[3]は /wo/を「弱うございます」等に現れる「日本語音」としている。
- 3) 紙数の都合上、全語彙のデータや、ゆれている語の各々の出典辞典類はあげられない。これらに関しては前掲修士論文の資料「語彙表」「ゆれ一覧表」を参照されたい。
- 4) ただし、「C」の読みに関して、「放送におけるアナウンサーの発音として望ましいと思うものは」を有識者と大学生に尋ねた石野[16]の調査によれば、以下のように「スィー」支持は多数派であり、この志向が強まれば「スィ」定着の可能性も高い。

	スィー	シー	どちらも	場合による	
有識者	33.8	36.3	9.3	18.6	
大学生	48.4	27.2	9.8	14.6	(単位は%)

- 5) 特に、トゥドゥとウィウエが隣接するものでは、「トゥエンティ/トゥエンティ」「ドゥエリング/ドゥエリング/ドエリング」のようなゆれがあり複雑である。本文中で述べた大学生の調査でも「マクトウェーン/マクトゥウェーン」は、発音はすぐできたが、それを内省しながらの表記では考え込み、文字化できない人が多かった。
- 6) 「ティ」が「テイ」や「テー」のように2拍分となる例もあり、たとえば浜島[18]に、「ティラー」(tiller [tilə]耕運機)が、>テイラー>テラー となった例があげられている。また、これとは逆に、entertainer は、母音が二重母音だから「エンターティナー」のままでよいのに、ティが過剰に適用されて「エンターティナー」となる例もある。後者は、促音を小さなツで表す正書法を当てはめすぎ、「ウォッカ」「カムチャッカ」「ゲッセマネ」のように促音化する例と同じく、過度矯正現象の一種である。
- 7) ここで注目されるのは、表記と発音のずれが個人内に生じていることである。本

稿のABCの分類は、発音と表記の個人内のずれの問題を説明するのに有効であり、結論をいうと、Aタイプの個人内のずれは表記が外来語音・発音が日本語音となり、Bタイプでは発音が外来語音・表記が日本語音となる傾向があると分析できる。これが妥当な結論かどうか、様々な年代を通じて調査を行い、検証する必要がある。

8) 指示物による外来語音と日本語音の使い分けを指摘したものに、石野[17]がある。

【参考文献】

- [1] R. A. ミラー編 (林栄一監訳) (1975)『ブロック日本語論考』研究社
- [2] 亀井孝、金田一春彦(1955) 国語音節一覧表 (『国語学辞典』付録) 東京堂
- [3] 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』東京堂
- [4] 馬淵和夫(1971)『国語音韻論』笠間書院
- [5] 城生佰太郎(1977)現代日本語の音韻 『岩波講座日本語5音韻』岩波書店
- [6] 古田東朔、山口明德、鈴木英夫(1980)『新国語概説』くろしお出版
- [7] 吉田則夫(1982) 音声・音韻 『国語概説(佐伯哲夫、山内洋一郎編)』和泉書院
- [8] 上村幸雄(1989) 五十音図の音声学 『講座日本語と日本語教育第二巻』明治書院
- [9] 小泉 保 (1990) 私の五十音図観 『日本語学』 9-2
- [10] — (1978a)『日本語の正書法』大修館 (1978b)外国地名の表記『言語』7-6
- [11] カケンブツシ寛子、大曾美恵子(1990)『外来語の形成とその教育』国立国語研究所
- [12] 奥村三雄(1991) 音韻の歴史 『講座日本語と日本語教育第十巻』明治書院
- [13] 石綿敏雄(1976) 外来語 『朝日小辞典 現代日本語(柴田武編)』朝日新聞社
- [14] 服部四郎(1951)『音韻論と正書法』研究社 (1960)『言語学の方法』岩波書店
- [15] 永田高志(1988) 外来音の定着とその意識『Sophia Linguistica 23/24』上智大
- [16] 石野博史(1981) 「順風満帆」をどう読みますか『文研月報』s 56, 8
- [17] — (1976) 外来語の表記 『日本語講座第四巻日本語の語彙と表現』大修館
- [18] 浜島 敏(1976) 外来語が日本語の音組織に与えた影響(1)『四国学院大学論集35』

A typification of variation in
loanword sounds in dictionary items

Hiroshi MATSUZAKI

There are two ways of incorporating foreign sounds into Japanese. One is to change the foreign sound into a Japanese sound (e.g. [di]→/zji/or/de/), and the other is to formulate a new mora(loanword sound), similar to the original form, filling in a "gap" in the phonological system (e.g. [di]→/di/).

A fluctuation occurs between the Japanese sound and the loanword sound.

Sixteen different dictionaries were employed to study variations in the moras listed below: /sje/[ɕe] /cje/[tɕe] /zje/[tɕe] /je/[je] /hje/[çe] /nje/[ne] /tsa/[tsa] /tse/[tse] /tso/[tso] /si/[si] /zi/[dzi] /ci/[tsi] /ti/[ti] /tu/[tu] /di/[di] /du/[du] /tju/[tju] /dju/[dju] /fa/[fa] /fi/[fi] /fe/[fe] /fo/[fo] /fju/[fju] /wi/[wi] /we/[we] /wo/[wo]

In this study, all loanword sound variations are classified into 3 types.

- A The fluctuation between the loanword sound in one mora and the Japanese sound in two moras. (e.g. /sjerareone/~/sjierareone/)
- B The fluctuation between the loanword sound and the Japanese sound with the same vowel. (e.g. /sjepaRdo/~/sepaRdo/)
- C " " "
with the same consonant. (e.g. /ataQsjekeRsu/~/ataQsjukeRsu/)